Chapter 1

戦災と復興の記憶

空襲で一夜にして一面の焼け野原となった本市。市民はそんな状況の中で、どのような苦難を乗り越えながら、復興を果たしてきたのでしょうか。当時の様子を空襲の語り部の原田恒弘さんと、復興の中心であった女性の立場から萩原みち子さんに伺いました。

住吉町二丁目
原田　恒弘さん　77歳

空襲の語り部
今、あのパワーがあれば何でもできる

復興には、産業界も懸命に取り組んでいました。近所の理髪店も有り合わせの材料（バラック）で店を作り営業を再開しました。当時の前橋経済の柱、製糸業も関係者が連携し、復興に努めました。

復興で一番苦労したのは女性だったと思います。働き手の男性は、戦地からすぐに戻れなかったり、戻っていても身体が弱ったりしていました。空襲の焼け跡の片付けも女性が頑張りました。満足な道具も無い中、素手や棒切れを使い、近所の女性たちで協力しながら一軒一軒片付けていきました。

戦後、昭和25年頃までは物が極度に不足し、インフレも激しかったですね。停電も多かったです。また食べる物も無く、やむを得ず多くの女性が、なけなしの貴金属や着物を持って、農村部に食料との交換に行きました。しかし、農家も十分に食料を持っているわけではありませんでしたので、交換できないこともありました。私も母と交換に出掛けたことがありましたが、満足な結果を得ることができず、足取り重く前橋に戻ったことがありました。母は、そのことを生涯忘れることができなかったようで、亡くなる前にうわ言のように私に謝っていました。

無い無いづくしの不満だらけの中で、みんなで力を合わせ、声を掛け合いながら復興に取り組みました。厳しい時代でしたが、明るさもあったと思います。今、あのパワーがあれば何でもできます。市民一人一人りが自分を見据えながら、これからの前橋をつくっていければ良いなと思います。

前橋大空襲
市内は甚大な被害

昭和20年8月5日。この日は朝から警戒警報や空襲警報が発令されては解除されるということを何度か繰り返していました。前々日から、米軍機の空襲を予告するビラが投下され、市内に緊張が走っていました。しかしそれとは対照的に、当日は青空の広がる暑い日でした。

そのまま夜を迎えた午後9時。突如警戒警報が発令され、9時45分には空襲警報が。10時30分から空襲が始まり、11時45分まで続きました。

この空襲では当時の市街の約8割が焦土に。死者535人、負傷者600人以上と、人的にも大きな被害がありました。また、周辺の町村も相当な被害を受けました。

空襲直後の市内の様子
（共愛学園提供）

インタビュー

全ての世代に伝えたい

全ての世代の人に戦争の記憶を知ってもらいたい思いで、子どもにも分かりやすい絵本を考えたり、千代田町三丁目の熊野神社で祈願祭を続けたりしています。生まれ育ったこの場所への思い入れが今の活動につながっています。戦災ではたくさんの命や歴史的なものが失われました。おみこしもその一つで、前橋まつりの前身である復興祭では、借りたおみこしを使いました。そんな時代があったことを今の若者に知ってほしいです。

熊野神社氏子会会長
大川　優さん　66歳

樋越町
高坂　桃子さん　30歳

受け継ぐ気持ち忘れずに

私の祖母は昭和２年生まれで戦後の復興を生き抜いた世代です。当時の話を聞くと、その体験のつらさや苦しさとともに、そのたくましさに驚かされます。

私たちは、祖母たちの体験を聞き、思いをめぐらすことしかできません。けれど、祖母の世代の努力を無駄にせず、それを引き継ぐ世代としての自覚は忘れないようにしなくては、と思います。

女性の立場からの復興
戦中・戦後の前橋を夢中で生きた

前橋大空襲で母親とともに畑を逃げ回り、生き残りました。空襲後数日は建物が燃え続けていました。私たち生き残った者は、協力して燃え尽きた木材の灰を片付けることから始めました。本当に食べ物がなく、野の草も食べました。

もともと書店を営んでいたので、10月頃にはリヤカーの上に本を並べて、営業を再開しました。何から何まで全て配給の中で、本だけでなく、リンゴや自転車の空気入れなど、何でも売りました。12月頃には廃材や疎開で郊外に預けていた材木を集めて、バラック小屋を建て、そちらで営業していました。戦後復興時の地所争いで壊しては建ての連続で、ようやく落ち着いたのが昭和40年頃でした。

店の経営で精一杯でしたが、昭和29年の商工祭ではそろいの浴衣で踊りました。生活が大変でも、ここまで復興したんだと、その時はにぎやかに見せたいと思っていました。七夕まつりにも積極的に参加しました。

その時は夢中でしたが、本当にいろんなことがありました。

みんな本当に一生懸命でした。あの頃と比べると、この辺りは寂しくなりました。時代の流れには逆らえません。ただ、たくさんの人が悲しい思いをする戦争はもうしてほしくないと思います。人口の減っていくこれからの社会にふさわしい暮らしを考える必要もあるように感じます。

千代田町四丁目
萩原　みち子さん　93歳